

【ポスター発表】

自閉症スペクトラム児の社会性スキルアップ支援に関する考察

ー女子中学生のサークル活動からー

○ 川崎医療福祉大学 李 永喜 (会員番号 002950)

キーワード3つ：女子自閉症スペクトラム児、サークル活動、TEACCH

1. 研究目的

自閉症スペクトラム児は対人関係づくりを苦手としていて、自発的に仲間集団をつくることが難しさいとされる。自閉症スペクトラム児が思春期になると、学習のことや性に関する関心、そして複雑な社会生活の中でより一層対人関係の難しさを抱えると考えられる。その結果、社会性を身に付ける機会も乏しくなるといえるのだが、しかし、自閉症スペクトラムの子どもに合わせての社会性を学ぶ場の提供が少ないのが現状である。

そこで、本研究は、A市内の自閉症スペクトラムの女子中学生を対象に TEACCH¹⁾のアイデアを用いたサークル活動に着目した。研究目的は、対人関係を苦手とするといわれている自閉症スペクトラム児がグループ活動を通してコミュニケーションスキルアップしていき、社会性を身に付けていくための支援方法と要件を明確にすることである。

2. 研究の視点および方法

2-1 サークル活動

当該事例は、自閉症スペクトラム児のコミュニケーションスキルアップと社会性を身に付けていくために始まったグループ活動である。報告者は初回から支援ボランティアとして、時には保護者のワークショップのファシリテータとして関わりながら参与観察を行い、フィールドノーツをとってきた。A市で療育を必要とする子どもの男女比較は、男子が72%、女子が28%(A市総合療育支援センターデータ)となっている。障害のある女子は特別支援学校のクラスにおいても、さらに小学校区単位の圏域においても人数が少ないため、友たちをつくるのが難しく社会性を身に付ける機会が少ないといえる。保護者からは、思春期であるがゆえに抱える子育ての難しさや性教育の困難な差に関する意見などがあつた。そこで、報告者は自閉症のある女子中学生の親と専門家A氏(以降、活動リーダーと記す)両方に事情を説明し、2009年3月15日に「サークル〇〇会」活動を始めることになった。参加メンバーは、親同士の関係で決めていて、子ども5人とその親5人、そして大学院生を中心にした支援ボランティア5人で始めた。その後、人数が増え、登録者は13人であるが、平均参加数は9人前後である。活動は、夏休みを除いて毎月1回行い、所要時間は2時間程度である。活動内容は、趣味活動、買い物経験、余暇活動、調理、生け花、性に関する勉強など、幅広い。活動の場はA大学を拠点にしているが、社会性や社会的エチケットを身に付けてもらうために公民館や地域のショッピングモール、レストラン、地下鉄の駅など様々な場所に出かけて行う場合もある。子どもたちへのプログラム説明や運営は、TEACCHの理論や方法に基づいて、構造化のアイデアを取り入れ、個々人に合わせた目標を設定しながら支援を行っている。

年間活動計画は親と協議をして決めていく。毎回、活動の前に活動リーダーと親とで打ち合わせを行い(2時間~4時間)、子どもたちの活動に対して親のサポート内容と役割分担

などを決める。時には、子どもがサークル活動している間、親を対象に子どもの障がいに関する理解を高めるための学習やワークショップを行う。定期的に TTAP (TEACCH Transition Assessment Profile の略;自閉症スペクトラム移行支援のためのアセスメントツール) を実施し、親にフィードバックして、その後のサークル活動での配慮などの反映を図っている。支援ボランティアから子どもの様子を聞き取り調査し、記録を取っている。

2-2 研究方法

サークル活動プログラムの企画、定期的な TTAP 実施とその後の親とのやり取りについて子どもたちのプログラム運営を担当している専門家 A 氏から説明を受けた。さらに親との打ち合わせや協議、学習会に参加する、親を対象にワークショップを実施し、親の変化について着目してエスノグラフィックの視点でフィールドノーツをとってきた。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて、前もって参加メンバーの親と活動リーダーに調査研究や学会発表の趣旨を説明し許可を得た。研究成果について親と活動リーダーに報告し、意見交換及び修正をしてもらった。活動の記録やビデオ撮影したものの検討について許可を得た。

4. 研究結果

定期的に活動をすることによって、互いに挨拶をするようになったことや他メンバーを意識した言葉や行動が見られるようになった。例として欠席したメンバーについて「〇〇さんはいないの」と言っている。活動リーダーに対して強く認識していることがうかがえる。報告者に対して 2 年目になってから挨拶や会話をしてくるようになった。親の報告によると全員が毎月楽しみにして待っているという。個人差はあるものの会話を交わすように変化していた。外出や買い物の計算の順番を待つことができるようになり、レストランという場を意識していることがうかがえる。活動リーダーが TTAP 実施に基づいた支援の組み立てて行うことは、親にとって不安や孤立感を軽減してくれたと親が語っている。子どもの活動の間、親同士の学習やワークショップの実施によって、親の日常生活におけるストレスや圧迫感のガス抜き場になると同時に親のエンパワメントを促す場となっている。

5. 考察

思春期の女子という共通の時期に、定期的に同じ空間で 2 時間一緒に活動することを本人たちがいきいきと楽しみの場として認識している様子がうかがえる。実践において子どもの個々人の個別性を充分配慮し、メンバー間と時間のバランスをとるための工夫が必要である。プログラム内容によっては子どもがストレスを強く感じる時もあり、その様子を記録、分析し、親と協議しながら次のプログラムに反映していく方法をとる必要があった。

サークル活動には、子どもの送迎、活動に必要な材料・用具の準備、活動中のサポート、日ごろの子どもの様子を報告してもらうなど協力者として親の役割が重要になる。親同士の関係や実際の負担を考慮しつつ、活動を継続していくための率直な議論と協働が要請されているといえる。今後の研究課題として親にインタビュー調査を行い検討したい。活動課題としては、子どもたちがいろいろなボランティアと接することから社会性を身に付けていくことにつながると期待されるが、実際には子どもを man-to-man で支援できるボランティアの確保が難しいのが現状である。

1) TEACCH(Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children の略、自閉症児および関連領域のコミュニケーションに障害のある子どもの治療と教育)